



# 私の履歴書

東邦地下工機(株) 代表取締役社長 岡本 幸憲

今回は事務局がご多忙な岡本社長を東京事業所にお伺いしてインタビューしました。



岡本 幸憲 (おかもと ゆきのり)  
昭和22年3月15日 山口県生まれ  
昭和58年 東邦地下工機(株)入社  
平成元年 代表取締役社長に就任

## ■学生時代

初代社長の長男として生まれ、7才のとき、東京支店開設に伴って、家族が東京に移転、それ以来東京で過ごす。

学生時代は、旺盛な好奇心と研究心から、「スキー」と「カメラ」に熱中。

スキーは年に1~2回、志賀高原のゲレンデに足を運ぶ。カメラは暗室に閉じこもり写真の現像を行った本格派、これが後に新商品の開発に役立つ。

## ■社会に出て

学校を卒業した後、財関係のシンクタンクで約12年間の勤務を経験。

その間、研究部門の他、海外事務所設立の業務に携わると同時に初代所長として3年間の米国生活を体験。

また、貿易立国論華やかなりし頃、官民協力のもとに設立された「貿易研修センター」第1期生として、1年間の寮生活を過ごす。

この時の交友関係や、前の勤務先での経験は公私両面にわたる社長の大切な財産のひとつ。

## ■会社の歴史

当社は3部門で構成。「製作部門」で小口径推進機・ボーリングマシン・ポンプ・ミキサーを製造。「建設部門」で土木一式・地すべり対策・堰堤基礎処理・一般グラウト・小口推進・薬液注入・アンカー・構造物基礎杭工事を実施。「地質調査部門」で地質調査工事を実施。

昭和21年、戦災で一時操業を停止していた旧ヤマト工作所の西部支店を拠点として山口県下関市で、父親が初代社長

として操業を再開。昭和58年に入社後、初代社長、2代目社長の薫陶を受け社長室長、副社長を経て、平成元年に3代目社長に就任。堅実な人柄と仕事への情熱で出入りの大手建設会社、国鉄の信頼を得て、社業を軌道に乗せ、試錐機械の総合メーカーおよび試錐、基礎工事のパイオニアに育て上げた。

## ■経営

「お客様の要望が開発の原動力」、「お客様が求める真の付加価値への敏速な対応」が基本。

モットーは「中小企業たれ」。

これを達成する基盤は優れた人材とその「適材適所」。

つねに社員が自分の能力を最大限に発揮し「自己実現」が達成出来る会社作りを目指す。

国際感覚と若さあふれるエネルギッシュなバイタリティーがあり、これが社員を引きつける魅力。

姓名学による鑑定では、「宿命的運・才能・人柄・生涯運が大吉で、積極的な行動力・柔軟な適応力・誠実温厚な人柄・敏感に反応できる感受性をもつ人。指導者運をもち、晩年に財力が得られる人とか。

## ■社員とのコミュニケーション

部長レベルは、インターネットで。各地の営業所長レベルは、営業所巡回時に食事会で。工事部門は、正月に揃って、神社で安全祈願を。顕著な業績をあげた部・課・開発者の表彰。

## ■信条・趣味

信条は「日々に悔なき人生」、「部門間のよいコミュニケーション」、「情報のクイックなフィードバック」。

趣味はゴルフ、スキー、読書、写真。

ゴルフのオフィシャルハンデーは10。

写真は撮影とコレクション。

## ■今後の展望

今後も長年培ってきた経験を基に、都市開発、資源開発を中心とした幅広い分野で、的確な時流の把握と、社会への貢献に努める。激務ゆえ、健康にはくれぐれもご留意を。

(事務局 葭田誠作)

MY TOWN

見どころろ食べ処

— 北九州編 —

〔 関門海峡と料理 〕

「海峡が揺れる」のキャッチフレーズのもとに夏の夜を彩る海峡花火大会は、関門海峡をはさんで、関門両市の発展のために海峡を活用して合同で行ったイベントで、両岸から打ち上げられる花火の競演は、見物客に大きな感動を与えています。

下関側の海峡花火大会は、昭和60年(1985年)から始められていましたが、「財団法人下関21世紀協会」と「もじまちづくり21世紀の会」との交流が進んだことによって、昭和63年度からこの2団体が中心となり両市合同のイベントへと発展しました。

第1回目の昭和63年(1988年)海峡花火大会の関門両市合計の総予算は2,000万円で、花火の数は8,500発。平成元年(1989年)の第2回目は、下関市制百年と門司港開港及び鉄道開業百周年を記念した盛大なものとなり、総予算3,500万円で花火

10,000発が打ち上げられました。民間主導のこの花火大会は名実ともに日本一、世界的な花火大会への発展が期されており、関門両市の交流史の上に咲いた一つの華といえます。

古来から世界への窓を開く港町として、その名を馳せていた『関門』。今では、貴重なものとなったレトロな街並みや風情を数多く残す場所として注目を集めています。明治39年に建設された下関の旧英国領事館は、赤レンガづくりの優雅なビル。わが国には他に例をみない段状の切妻屋根をもつ建物です。そして、国指定の重要文化財である駅舎や、明治・大正時代のモダンなオフィスビルなどが肩を並べている門司港地区は、これらの歴史的建造物が復元・整備されて、新しい観光スポット「門司港レトロ地区」として生まれ変わり、海峡を軸とする『関門』の観光が一層充実されました。